NIE全国大会神戸大会 2日目

四つの公開授業や22の実践発表

大会2日目は、神戸市東灘区の甲南大学岡本キャンパスで分科会が開かれた。

公開授業では甲南小学校（神戸市東灘区）の「シンブリオバトルで主体的な学びを」▽西宮市立浜脇中学校の「『NIEノート』を通して、主権者としてのまちづくり」▽姫路市立豊富小中学校の「新聞で開くメディアリテラシー」▽兵庫県立北神戸総合高校の「新聞に〝ツッコミ〟を！」

公開授業

シンブリオバトルで新聞に興味と考察を

——甲南小学校

自分が面白いと思った本を紹介し合って一番読みたい本を投票で決める書評合戦「ビブリオバトル」。神戸市東灘区の甲南小学校は昨年度からそのバトルをNIE授業に取り入れた。

児童たちが自分で選んだ新聞の「推し記事」を紹介しあう。新聞なので「シンブリオバトル」と名付けた。公開授業には28人の4年生が出席し、熱弁を交わした。

「予選」は3、4人ほどの班に分かれて、新聞社から発行されていることも新聞の記事から、自分が面白いと思った記事を示し、どこに疑問をもったか、どんな感想を得たかなどをそれぞれ発表。各班の勝者は前に出て順に発表し、最後には投票で勝者を決めた。

「温暖化なので暑さに強い体をつくろう」「おいしいサクランボの産地を守りたい」「都市対抗野球は東京ドームが会場なのになぜ『大人の甲子園』と書かれているの？」

児童たちの興味を引いた記事は様々。素朴な疑問でも、児童たちは考察を深める。

発表では「阪神の近本選手がプロ入り前に所属していた会社は？」などクイズも交えて、聞く児童たちも参加しながらバトルを楽しんでいた。

シンブリオバトルで発表する児童

推し記事をアピールする児童

公開授業

新聞で開くメディアリテラシー 震災の記事を読み比べ

——姫路市立豊富小中学校

2020年に小中一貫の義務教育学校として開校した姫路市立豊富小中学校は、当初からNIEに取り組んできた。公開授業では地元の神戸新聞など地方紙を題材に、東日本大震災の当初から今に至るまでの記事を比較した。

参加したのは前期課程6年1組の24人。

授業では各地の地方紙の記事を読み比べをした。班ごとに記事を分析するなど何度も話し合いを重ね、同じ通信社の記事を掲載していても見出しや記事の大きさに違いがあることなども指摘。「そこに新聞社、編集者の思いの違いが表れるのでは」などの指摘がなされた。

神戸新聞の上田勇紀記者が震災後3か月の被災地を取材した記事と、阪神・淡路大震災から30年にあたる今年春に東日本大震災の被災地を取材した記事も深掘り。議論の後に上田記者が登壇するサプライズに児童たちも盛り上がった。上田記者は「震災後は記憶が鮮明なうちに被災者の話を聞き、津波の恐ろしさなど大地震に備えてほしいと」という気持ちがあった」と話し、今年は継続して取材している、娘が震災のため旧防災対策庁舎で行方不明になっている父親を題材にその葛藤や、震災遺構の是非などに焦点を当てたことを説明。「阪神・淡路大震災では震災遺構という議論がなく、兵庫県の読者にも伝えたかった」などと話していた。

豊富小中学校の公開授業

公開授業で意見を述べる豊富小中学校の児童

分科会 第1部 実践発表

発表者

福田浩三主幹教諭

（兵庫県立伊川谷高校）

NIE神戸大会分科会第1部の実践発表は、11講座行われた。その中で、高校の実践発表『多文化共生への橋がけ～新聞記事の「やさしい日本語」書き換えを通して～』を選び、聴講した。発表者は兵庫県立伊川谷高校の福田浩三主幹教諭。

福田教諭は、「昨年1月1日における在留外国人は332万人余で、日本の総人口の2・6％（38人に1人）に当たる。今後、その割合は増えると予測されるので、彼らの言語面での支援は急務」と日本の状況を説明。そして「これまでNIEを通し、幅広い分野への興味関心、情報の理解力、効率的情報発信を指導してきた。今後は社会の変容に対応して生徒に多文化共生・国際理解も意識させたい。それには、やさしい日本語の学習が、効果があると考えている」と語る。

同教諭のNIE実践は、新聞に慣れ→記事を読み解き→やさしい日本語学習→やさしい日本語を意識して記事をまとめる直すといった流れで行われた。新聞に慣れる段階では、日刊各紙、朝日中高生新聞、学校の「學年通信」、はがき新聞を利活用。また、有料で神戸新聞を4日間講読、感想文コンクールの材料としたほか、「新聞読み方講座」「やさしい日本語講座」でも活用した。

やさしい日本語とは、単に記事を書き直すのではなく、A5のハガキ新聞にまとめる方法がとられ、仕上げは、生徒各自の作品の発表となっている。また、この学習を通して、在籍の8割が外国籍の地元夜間中学との交流が行われ、やさしい日本語の活用実践が行われている。

福田教諭

分科会 第2部 実践発表

発表者

藤原裕佳主幹教諭

（姫路市立あかつき中学校）

伊達実教諭（同）

NIE神戸大会分科会第2部は、11時から開始された。実践発表は11講座行われ、姫路市立あかつき中学校の「夜間中学校でのNIE」を聴講した。発表者は、同校の藤原裕佳主幹教諭と伊達実教諭。

同校は、2023年4月に開校した播磨地域初の夜間中学。16歳から92歳まで幅広い年齢層と外国籍の多様な生徒が在籍する。限られた授業数であるが、自主的編成を行う利点を生かし、「生活につながる学び」に取り組んでいる。新聞は、生活につながる記事を取り上げると、学習意欲をより高めることができると発表者は語る。

同校のNIEは、まず読売・日経・産経・神戸・JAPAN NEWS・朝日小学生・毎日小学生を購読、新聞コーナーを設置する。新聞は教室への持ち込みも可としている。同校では、全教科で新聞を利活用している。また、校内紙「あかつき新聞」において生徒に自己表現の機会を提供することで、自信・自尊感情を高めることを目標としている。

実践の具体例は、社会では、新紙幣に関する新聞記事を使って、新紙幣に採用された人物や制作技術（3Dホログラム）について学習。国語では、新聞記事を生かして俳句作りや見出し作りを行った。「総合的な学習」科目では、実際に新聞大の模造紙を使って、新聞記事を作った。

発表者は「NIEで生徒は、まず新聞の一覧性や多彩な言葉に気付いた。そして、身近な題材の自分との関わりや社会の課題を知り、生徒間の対話を通し、多面的・多角的な視点の獲得を進めることができた」と成果を述べた。

NIE神戸大会「展示コーナー」

新聞ドレスを着る西沢さん

NIE全国大会神戸大会では、会場外の通路やミニスペースで、NIE活動等を紹介するコーナーが設けられた。7月31日、全体会が行われた神戸ポートピアホテル・ポートピアホールの1階には新聞アート作品、2階には、阪神・淡路大震災パネル展示コーナー、しまんと新聞ばっぐ展示コーナー、資料配布コーナー、3階の会場入口付近には、企業・新聞社ブースコーナーが設けられた。翌8月1日の会場、甲南大学岡本キャンパスでは、企業・新聞社ブースと資料配布コーナーに加え、全国各地のNIE実践を紹介するポスター展示コーナーが設置された。

ポスター発表は昨年の京都大会に続いて行われた。北海道から沖縄まで全国各地の学校・団体・新聞社のNIE実践例の紹介のほか、児童生徒が作成したポスターも並んだ。参加団体は約70。阪神・淡路大震災30年の節目を迎え、「防災とNIE」コーナーも設けられた。

7月31日の展示作品の「しまんと新聞ばっぐ」は、新聞紙を材料として作った手提げバッグ。しまんとは、高知県を流れる「四万十川」から名付けられた。作品を展示した一人、神戸新聞広谷大屋専売所前所長の長島敏行さんは、バッグのほか新聞紙だけでジャケットも作成、「新聞紙は、かなりの堅牢性がある」と所長時代、話していた。

ポートピアホール1階の「新聞アート作品」は、新聞紙だけで作った巨大なドレス。31日全体会のあと行われた交流会の開演冒頭、このドレスをまとって西宮市出身のアーティスト西沢みゆきさんが登場。新聞を使って世界中で様々なパフォーマンスを展開、「新聞女」と呼ばれる西沢さんは、今年の全国の元日の新聞を使ってドレスを制作した。交流会で司会者は「SNS時代における新聞界の連帯と決意を象徴するような作品」と評した。西沢さんは「今、ニューヨークやウクライナ、西アフリカのブルキナファソから連絡が来ているが、新聞をちぎって歩いていると、世界中から呼んでもらえる。新聞アートで世界中の人が楽しんでいただけたらいい」と語っている。

手前はしまんとばっぐ、奥は阪神淡路大震災展示

新聞情報社の新聞紙面やコピー約200枚を会場で配布

紙面やコピーを会場で配布した＝写真。

NIE全国大会神戸大会の会場では、兵庫県西宮市立浜脇中学校が、新聞情報社の同校は先進的なNIE授業に学校ぐるみで取り組んでいる。大会では渋谷仁崇主幹教諭がパネル討議のパネリストを務め、分科会では公開授業をした。

配布されたのは同校のNIE授業を紹介した7月19日付の新聞情報紙面。同校の取り組みを端的に分かってもらうためで新聞情報社も協力し、40部を提供して初日の全体会会場で希望者に渡したほか、2日目には分科会の公開授業の教室で、学校側がコピーした紙面約160枚が配布された。